「文藝春秋」(2011年7月号)

昭和天皇

⑦3 戦果奉告

昭和十七年、ガダルカナル そして彼の人は、伊勢へ——

福田和也
文芸評論家
慶應大学教授

昭和17年靖国参拝

ルーズベルト

岡田誠三

ワシントン記念塔が、みるみる近づいてきた。

「あのてっぺんにぶつかったら、世界で一番、運が悪いという事になるのじゃないかな」

副操縦士席に陣どったウィンストン・チャーチルが云った。

「お任せください、決してヘマはしませんから」

ケリー・ロジャース主席操縦士は、笑いながら請け合う。

三つの垂直尾翼をもつボーイング三一七型飛行艇は、滑るようにポトマック川に着水した。

初夏の夕暮れの下、ジョージ・マーシャル将軍以下、合衆国政府の高官たちが出迎えた。

「二十七時間ですよ。船に比べればとてつもなく早いけれど、それでもね」

出発地、スコットランド、ストランレアの入江を想起しながら、チャーチルは自らの疲れを吐露してみせた。

出迎えはすぐに切り上げられ、チャーチルはイギリス大使館に入った。

飛行中に届いた電報をすべて読んだが、さして重要なものはなかった。

テラスでの夕食は快適だった。

「どう考えても、われわれの大使館の方が、ホワイトハウスより、よい立地だね」

チャーチルは、早く床についた。

翌日、六月十九日早朝、チャーチル一行は、ハイド・パーク に飛んだ。

ルーズベルト大統領は、滑走路脇の車で待っていた。

自動車は、下肢が不自由なルーズベルトのために、特殊な仕掛けが施されていた。すべての運転操作を両腕でできるよう装置されているのだった。

ルーズベルトは、自らの腕を示した。

鍛え上げられた筋肉をチャーチルに触らせた。

「ジョー・ルイスが羨ましいと云ったよ、僕の筋力がね」

ヒトラーが、アメリカのリングに送りこんだ、マックス・シュメリングをノックアウトした、黒人ボクサーのことは、イギリスの首相もよく知っていた。

けれど、運転は危ういものだった。

装置は、極度に複雑だった。

二度ほど、ハドソン川の断崖から落ちそうになった。

「外交ほど、危険なものはないな」チャーチルは改めて思った。

会談は、ハイド・パークにある、ルーズベルトの生家で行われた。

議題の中心は、原子力爆弾だった。

「ドイツは、重水の入手を急いでいます」

ハリー・ホプキンスが、秘密資料をいくつか開示した。

「大統領、私が思うに、この件に関しての進捗度は、多分、わが国も、御国も同じぐらいだと思います。今、必要な事は、われわれの研究を合流させ、双方の成果を提示し、平等にわけ合う事ではないでしょうか。そうすれば、われわれはドイツにも、日本にも遅れをとることはないでしょう」

チャーチルは、説いた。

「はっきり云って、専門家たちが専門用語で語っている事は、私には理解できません。科学者たちは、研究の必要を唱えてはいながら、大西洋両岸の研究者のなかでその成功を約束した者は一人もいません。にもかかわらず、何億ポンドもの予算を投入するように、われわれにたいして要求している」

もしも、アメリカが合同に賛成しないのであれば、独力でも原子爆弾を開発する覚悟を英国の宰相は決めていた。

「実験場所は、カナダでどうでしょう。カナダはウラニュームの入手に、積極的に協力してくれました」

ウランの供給に協力したとしても、カナダは実験地の提供を渋るかもしれない。それだったらイギリス本土に作らざるを得ないだろう、その覚悟はすでに固まっていた。

「いや、わが国の方が、いろいろな意味で好適でしょう。どんな事故が起きても問題にならないような場所——砂漠とか荒野とか——が沢山ありますから」

大統領は、一分の迷いもなく、実験場を自国に設けることを承諾した。

二十一日朝、チャーチルとルーズベルトは、大統領専用列車でワシントンに到着した。

ホワイトハウスでチャーチルは、エア・コンディショナー

の付いた、広い部屋を提供された。
一時間ほど、電報と新聞を読んだ後、大統領の書斎に赴いた。
一通の電報が、大統領のもとに届いた。
何も云わずに、ルーズベルトは電報をチャーチルに手渡した。
「トブルクは陥落、捕虜二万五千」
とても信じられない……。
副官が、即刻、ロンドンに問い合わせた。
リビアのトブルクの陥落は事実だった。捕虜は三万三千だという。この失陥により、アレクサンドリアが爆撃される可能性が高くなった。
「満月が近いので、東部艦隊を地中海から運河南部に移動させたい、とロンドンは申しておりますが」
チャーチルは、自らが受けた衝撃を、同盟国の大統領に対して隠す事をしなかった。
(敗北と不名誉は別のものだ……)
「わが国は、何をすればよいでしょう」
大統領は、訊ねた。
「戦車を、できるだけ多くのシャーマン戦車を、出来るだけ中東に送ってください」
ジョージ・マーシャル将軍が、呼びだされた。
「シャーマンは、まだ生産がはじまったばかりです。先週、やっと最初の三百台が配備されました。次の三百台は、来週にも用意できるでしょう」
マーシャルは、少し考えてから云った。
「そう、それから一〇五ミリ自走砲は、百台なら、すぐに送る事が出来るでしょう」
とりあえず、エンジンを装着していないシャーマン三百台と自走砲が、六隻の高速船に積み込まれた。
エンジンを積んだ船は、バミューダ沖で、ドイツの潜水艦に撃沈されてしまった。
けれど、マーシャルはただちに三百台のエンジンを、進発させた。
アメリカの工業力の、爆発的な力量を、チャーチルは改めて認識した。

∴

彼の人は、木戸幸一内大臣を召して、質問した。
「ドイツ軍がトブルクを陥落させ、エル・アラメインに進撃しつつある。ヒトラー総統へ、祝賀の親電を打つ必要はないか」
ミッドウェーの失陥以降、戦争の先行きに不安を抱きはじめていた彼の人にとって、ドイツの大勝は、久しぶりに心躍る報せだった。
木戸は、「武官長と検討させていただきたく存じます」と云って、御前を退いた。

蓮沼蕃侍従武官長と、相談した後、報告に訪れた。
「ヒトラー総統から、わが方に対して、戦勝の祝電など届いた事がございません。当方から先例を作る事は慎重を要するかと存じます。目下の状況におきましては、祝電等については、無き事とするのが適当と存じます」
内大臣の言葉を、彼の人は受け入れた。

∴

生さぬ仲の娘のために、妻のシヅ子は毎日、出歩いて嫁入りの衣装や箪笥を物色していた。
もちろんヤミである。
「まだ、結婚相手も決まっていないのに、おかしいじゃないか」
獅子文六は、何度も云ったが、母としての意地というか迫力があって、余り強くも云えなかった。
総力戦体制下、贅沢品は事実上、製造禁止だったので、一通りの嫁入り仕度を用意するのは、大変だったが、さほど強健でもない体を押して、毎日、シヅ子は出掛けていた。
「ママって、本当に時局的じゃないのね」
娘の巴絵は呆れていた。
その一方で、獅子は開戦後、突然軍人贔屓、それも若い軍人に肩入れをはじめた。
「どうしたんですか、軍人があんなに嫌いだったのに」
シヅ子の皮肉な口調が、ちょっと癇に障ったが、何とも云い返さずにいた。
「若い人だって嫌いだったでしょう」
その通りだった。
二十代の生意気で、小癪な若い男が大嫌いだった。
(それは、二十代の自分を、今でも嫌悪してるからだが……)
皮膚病に罹った野良猫のような若者たち。

あなたの本を文藝春秋で作りませんか?
自費出版のご案内
●誰に読んでもらいたいかを一緒に考え、原稿の完成度を高めます。
●ずっと残るものだから、手抜きのない編集制作をします。
●文藝春秋の刊行物として品質を保つため、刊行点数を制限しています。
●書店での流通をご希望の場合には、販売委託制度がございます。
一冊の本を作るには、手間ひまがかかります。
全体の構成、原稿の整理、文章の校正、装丁等々。
当然それなりの経費がかかりますが、必ず、
ご満足のいただける「あなたの大切な一冊」をお作りします。
文藝春秋企画出版部
〒102-8008
東京都千代田区紀尾井町3-23
TEL 03-3265-1211(代表)
FAX 03-3265-1257
http://www.bunshun.co.jp
■案内書進呈/見積もり無料

だから、獅子文六は、文学青年を身辺に集めたり、面倒を見たりしなかったのだ。
ところが、開戦以来、青年を見る目が変わってしまった。
自分でも、驚くほど電車や街路の若者に惹かれていた。
みんな、貧しい服装をしているのに、清々しい。
清々しく見える。
(精神的に美しい顔だちをしているなぁ)
思わず、感心してしまう。
先日、千駄ヶ谷で、市電から道路に飛び下りた青年に、自転車にのった若者がぶつかった。
これは、喧嘩になるな……
だが、電車から降りた青年は、緊張した顔はしていたものの、自転車とともに倒れた青年を抱き起こしたのである。
自転車の青年は、やや怒気を帯びていたが、起き上がると、軽く頭を下げた。
それを見た相手も、頭をさげ、そのまま別れた。
(偉いもんだな、二人とも……)
そんな時に、真珠湾への潜航艇による特別攻撃の報に触れたのだ。
死ぬ事が分かりきっているのに、小さな船で、敵に向かって行った九人の下士官に、滅法感心してしまった。
フランス暮しが長く、個人主義に徹底的に染まっていた獅子文六は、彼等の犠牲的行為に深く感動してしまったのだ。
新聞で、彼等の記事を見ると、一、二行で、涙が滂沱として流れてくる。
(一体、どうしちまったんだろう。自己犠牲の精神なんて、まったく自分には関わりのないものだったのに)
「軍神」という言葉には、どうしても馴染めなかったが、新聞紙上に掲げられた、彼等の、あどけない、素直な顔を見ていると、堪らない気持ちになった。
「そんな、人情家だとは思いませんでしたわ」
妻に、毎日、冷やかされた。
「人情じゃないよ。真実に偉いと思ってるんだ。偉い、偉いんだよ、この連中は」
獅子は、九人の名前を諳んじただけでなく、各人の郷里や性格なども頭に入れていた。
新聞は、大仰な報道もあったものの、注意深く読んでいれば、だいたいは把握できた。何しろ、小説家なのだから。
彼等は、みな、豪傑でもなければ、秀才でもなく、平凡な、どこにでもいる青年たちだった。
その平凡な青年が、自らの命をかけて、潜航艇に乗り込んだ事に、獅子は、深く深く心動かされたのだった。
獅子は、朝日新聞から、連載小説を依頼されていた。
新聞小説を書いている間は、徴用が免除されるという噂が、出版界に流れていた。
開戦以来、すっかり愛国者になった獅子は、国のために尽くす気持ちは多かったものの、徴用は嫌だった。
癇癪持ちだったので、低劣な下士官などともめて、大きな

騒動を惹き起こすかもしれない。
下手をすれば、二度と帰国がかなわないような羽目に陥るかもしれない。
なにしろ、徴用文士は、軍隊教育でスジガネを入れるというのだ。
「そんなもの、軍人に入れてもらわなくても、俺はもともとスジガネ入りだ」
とは威張ってみたものの、徴用は御免だった。
それで、朝日新聞の要請に応じたのだけれど、戦争中だから、どうしても連載の内容は制限されると、学芸部長は云う。
「大東亜戦記みたいなものをお書きいただけませんかね」
前線にも行ったことがない、まるっきり戦争の体験もない、自分に戦記なんてものが書けるだろうか。
火野葦平だったら、いくらでも書けるんだろうが……
戦争どころか、教練すら参加したことのない自分に、どうやったら戦争が書けるのだろう。
真珠湾に突入した下士官の事なら、書けるかもしれない……
「いいですね、それで行きましょう」
学芸部長は、即座にとびついた。
「いや、九人全部を書くのは、僕の手に余る。一人を選ばしてくれないか」
鹿児島出身の下士官、横山正治を主人公にする事にした。
鹿児島は、前作『南の風』の舞台になった場所で、かなり土地勘があった。
そのうえ、鹿児島人が獅子は好きだったのである。
朝日新聞は、取材の手助けに、ヴェテランの海軍記者をつけて、取材旅行に出してくれた。
呉軍港では、何の成果もなかった。
戦争中なので無理もないが、これでは小説が書けない。
ところが、江田島の海軍兵学校を参観して風向きが変わった。
「こんな純白で、清冽な学校がこの世にあるものだろうか」
規律、規則が大嫌いな自分が、規則ずくめの学校に感動するのが不思議だったが、いくら理屈をつけても、感じている自分を否定することは出来なかった。
生徒たちが、軍帽に白い作業着を着て運動場に駆け込んで来るのを見るだけで、涙が出てくるのだ。
鹿児島で、モデルとなった中尉の生家を訪ねた。
場末の小さな米穀店だった。
父親は、すでに死去して、母親と兄の二人きりの所帯だった。
一日中、弔問客が押し寄せていた。
天皇皇后両陛下の供花があり、女学生が寄せた血書の手紙もあった。
誰が打ったのか、「軍神の生家」という標杭が立てられていた。

二人の遺族は、ただ茫然としていた。
威儀を繕うような素振りも見せなかった。
（この二人が、「軍神」という言葉に、一番、面食らっているのかもしれない）
飾り気のない、昔ながらの謙譲に溢れていた。
その後、十日ほど鹿児島で取材をした。
予想通り、平凡で穏健な青年だった。
東京に帰って、学芸部長とともに海軍報道部を訪ねた。
連載の趣旨、内容を説明した。
「彼が、平凡きわまる生い立ちで、平凡な人柄だった、という事を書きたいのです。その戦功は、誰でも識っていることなので、その平凡さを書かせていただきたい」
学芸部長は、少しく緊張しているようだった。
「それこそ、当方の望むところです。秀才で豪傑なんて書かれると、誰も真似しませんからな」
担当の中佐は、云った。
日露戦争の頃の軍人だったら、こんな事は云わないだろうな。まるで商売人じゃあないか。
少し落胆したが、連載は決まった。
「これは、これまでの戯作とは違うのだ」
そういう意気で、獅子は本名の岩田豊雄で新連載を執筆することにした。
昭和十七年七月一日から朝日新聞で、『海軍』の連載がはじまった。

『海軍』は、大戦中、一番のベストセラーとなり、松竹により制作された映画も、大当たりをとった。

∴

七月に入って、東京は連日、気温は三十度を越していた。
彼の人の体調を気遣い、東條英機首相、松平恒雄宮内大臣が、何度も日光への行幸をお願いしたが、お聞き届けにならなかった。
「かかる時局に、涼しい処に行く気がせぬ」
そう仰せになって、陸軍、海軍など、しかるべき処に行くと云う。
十三日には、霞ヶ浦の十一連合航空隊に行幸した。
まず、土浦で予科練の体育、整備作業を検分した後、霞ヶ浦で計器操作地上練習、飛行作業、爆撃地上練習を天覧した。
天候の都合により、空戦訓練は出来なかった。
今回の行幸は、純粋に彼の人の発意によるものであったため、霞ヶ浦の航空隊員の感激は、深く、大きいものだった。
土浦では、数週間前、ジフテリアが発生していたので、行幸するかどうかで、議論があったが、結局、無事に終了し、すべてを調整した城英一郎侍従武官は、肩の荷を下ろした。
日光田母沢御用邸行幸啓は、十六日からに決定した。
二十一日には、宇都宮陸軍飛行場に行幸し、挺身隊の演習

を見学した。
その日、杉山元（はじめ）参謀総長から、上奏があった。
ベルリンの大島浩大使から電報で、リッベントロップ外務大臣が、日本の対ソ参戦を申し入れてきたというのである。
「総長は、どう考えるか」
彼の人の御下問に、杉山は珍しく明快に答えた。
独ソの戦局は、変化していくでしょうが、ドイツ軍はコーカサス方面に力を注いでいるようでございます。ソビエトは、最悪の場合でも、シベリアで頑強に抵抗すると存じます。然る場合、わが国が東方から攻撃しても、戦場からは遠いのでその効果は期待できません。従って慎重に対処するべきかと存じます。
「従来の方針通りということか」
ソビエトが挑戦して来ないかぎり、従来通りに処置したい、と杉山は云った。
「ドイツとイタリアの、インド洋方面への攻勢の可能性をどう判断しているか」
トブルクの失陥により、英軍がインド洋まで退くのではないか、と彼の人は考えているようだった。
「ドイツ軍の進撃が、中近東とインドに大きな脅威を構成しつつあるのは、明らかでございます。その点につきましては、海軍による作戦強化が望ましいかと存じます」
一息に述べた後に、「インドに対する地上作戦は、慎重に検討したい」と、総長はつけ加えた。

「インドへの姿勢はそれでよいと思う。その方針で研究せよ」
彼の人は命じた。
七月二十九日、彼の人は、明治天皇三十年式年祭のため、東京に還った。
八月一日、再び田母沢に戻って避暑生活が再開された。
前日の驟雨のおかげで朝から天気が良かった。
秋が到来したような陽気で、日の光も黄色にみえた。
朝、いくつかの上奏の後、八月五日に竣工式を行う予定の戦艦武蔵のための勅諭に彼の人は署名した。
昼すぎ、彼の人は皇后と、四人の内親王を連れて、小倉山に赴いた。
皇后と内親王が池で釣りをしている間、彼の人は粘菌を採集していた。
昭和四年、南紀行幸に際して、彼の人は、田辺湾神島沖、戦艦長門の艦上で、南方熊楠（みなかたくまぐす）の御進講を受けた。周囲の者に配慮する彼の人としては珍しく、五分間の延長を所望した。この時、彼の人は熊楠から、粘菌の標本を譲り受けたのである。
彼の人は、いくつか新種の粘菌を発見し、服部広太郎学習院教授の名義で『那須産変形菌図説』を上梓している。

∴

コーヒー畑に林檎のような白い花が咲いていた。
オーエンスタンレー山脈の北麓、ココダに、無電機と無線技士を残し、岡田誠三は、同僚の朝日新聞記者、佐藤忠雄とともに、堀井富太郎少将率いる部隊に従った。
兵士たちは、二十日分の米に粉味噌、粉醤油、手榴弾、小銃弾、円匙、十字鍬、三角幕など、五十キロの荷物を木樵の負子で担いでいた。
これが、砲兵、工兵になるとさらに重さが増えた。
その荷物を背負って、標高四千メートル、延長六百キロの山脈を人力で越えるのである。
「まるで厨子を背負った行者だな」
岡田は、どこまでも続く隊列を見上げて云った。
発端は、ミッドウェー海戦だった。
ミッドウェーでの敗北の結果、日本が根拠地としていたラバウルが危機にさらされた。
ラバウルとポートモレスビーは指呼の間であり、敵がポートモレスビーから反攻を仕掛けてくるのは必至であった。
大本営は艦艇が不足した事に鑑み、陸からの攻撃でポートモレスビーを占領する計画をたてた。東部パプア地方、北のブナ付近から山脈を縦断し、ポートモレスビーを急襲、制圧するという計画だった。
堀井部隊の参謀である田中豊成中佐は、トラック、自動車はもちろん、駄馬も登山に使えないため、すべてが人力による補給になる事、人力で長大な補給経路を維持する事は到底、不可能との意見を具申したが、大本営の意志は変わらなかった。
山脈に入ってみて、スタンレーは尾根つづきではなく、山頂が一つ、一つ独立している事がわかった。
一つの山頂を越えると谷底のジャングルまで下り、そこからまた麓に出て次の山頂を目指すのである。
オーストラリア兵は、山腹の高い位置に散兵線を敷き、あらかじめ照準をあわせて、昇ってくる日本兵を狙撃した。
部隊が前進した後に、白木の墓標の列が、長く長く続いた。
ジャングルのなかは、ビロードのような苔が敷き詰められていて、温室のような過飽和の状態だった。ひとたびジャングルを出ると、今度は硬く鋭角的な鉱物の世界だった。
携行した食料は、食べぬうちに皆腐った。
岡田は、二つのリュックのうち、一つに薬品を携行していたがそれもみな食べてしまった。何でもいいから、口に入れたい。機械的に足を動かしていた。
「敵さんの残した、凄い食料があるぞ」
誰かの叫びで、隊列は途端に崩れた。
パプア人の小屋に、兵隊がむらがっている。
岡田も飛び込んでバターとビスケットとコンビーフを、一度に口のなかに突っ込んだ。
出発から二週間が経った。
スタンレー山系の五分の四を踏破してきた。
最後のピーク、イオリバイワ峰に達し、オーストラリア軍の山中陣地を夜襲で占領した。
その次の日の朝。
「海だ、ポートモレスビーの海が見えるぞ」
岩にしがみつきながら、兵隊が叫んだ。
果てることなく続いていた山塊が、視界から消えている。
樹海の拡がりから透いて、海が輝いている。
全部隊の休止が命じられた。
当初、喜びで迎えられた休止は、長引いた。
ガダルカナル島での、アメリカ海兵隊との戦闘が激化している、という情報が流れた。
第十六軍司令官今村均中将から、堀井少将に宛てて、「貴部隊ハ現在位置ノ第一線ヲ集収シテ、スタンレー山系中ノ作戦上適当ト思料スル地点ヘ後退セヨ」と打電してきたのである。
田中参謀が、命令に従って後退作戦について語りはじめると、連隊長の一人が怒鳴った。
「地図に線を引いているお前に何がわかる。部下の血を流してここまで来たのだ、一歩もさがる事はできんぞ」
連隊長の傍らで、中隊長が汚れた包帯で巻いた刀の束を握っている。
「このまま、一路、ポートモレスビーまで進撃していただきたい」
アンペラの上に端座している堀井少将は、飯盒の蓋に立てた蠟燭を見つめていた。
司令部の殺気は消えない。
色白の副官が、電報を二通届けてきた。
「スタンレー山系ノ戦線ヲ撤収シ、可及的速カニブナ海岸ニ撤収セヨ」
二通は同文で、一通は今村から、もう一通は大本営であった。
この事は、命令が今村の独断によるものでなく大本営、つまりは彼の人から発せられた事を意味していた。
「陛下の命令であれば、すべてやむをえない」
堀井少将が云った。
連隊長が、不動の姿勢をとり、敬礼した。
一座の将校すべてが続いた。
(最も抽象的だと思っていた天皇の観念が、今、もっともアクチュアルに機能している)
岡田は戦慄した。
堀井少将は岡田と佐藤記者に声をかけた。
「君たちは、明日、すぐに下がってくれ。非戦闘員を養うことはもう出来ない」
その言葉に岡田は、記録者をもつだけの文化的余力がこの部隊にはもうないのだ、と思った。
田中参謀が、砲兵隊長と論争していた。
「砲兵が砲を捨てていけますか、参謀、断じてできません」
「しかし、今では、一人でも生きている者を返すことが、将

校のつとめではないかね」
全前線に、退却が命令された。
しばし茫然とした後、誰もが先を争って逃げだした。
学徒出陣の連隊旗手が、「こん畜生」と叫びながら、軍旗を谷に投げ込んだ。
「食い物をくれ、食い物をくれ」と呟きながら倒れてゆく兵士たち。
そのなかを天秤棒を振り分けにして、タロ芋を担いだ若い兵隊が走ってゆく。
工兵隊がクムシ河にかけた橋は、破壊されていた。
筏を組んで河を渡るしかなかった。
堀井少将と田中参謀は、筏から落ちた。
救おうとする部下たちに「わしらのような年寄りに構わず、君たちは助かってくれ」と云って沈んでいった、と後に岡田は、小太りの副官に聞いた。
海岸に着いた。
夕方になって、二隻の輸送船がやってきた。
夜半に出港した。
岡田らが乗り込んだ船は、アメリカ軍機に攻撃されて沈没した。
何とか僚船に助けられた。
ラバウルに戻った。
留守をしている間に、ラバウルは焼野原になっていた。
ハイビスカスの花が咲き乱れていた島嶼は、爆弾の破片と火山灰にまみれていた。
方面軍参謀、大本営参謀、随行してきた記者が犇めいていた。
誰もが、ガダルカナルの話をしている。
岡田が、ニューギニアの話をすると、「時と場所を心得ない奴」と云わんばかりの反応をされた。
記者団は、大本営参謀に、共同記者会見を、申し込んだ。
数次に及ぶ交渉の末に、会見は実現した。
やってきたのは、辻政信中佐だった。
精悍な顔つきをした辻参謀は、大股で長靴を鳴らしながら席についた。
どこか、きらびやかな輝きがあった。
「アメリカはやりよるぞ！　諸君、大したものだ」
率直に語りだした。
三十分語り、退場しようとした。
(これでは、ガダルカナルの話だけで終わってしまう)
「ポートモレスビーの山越え作戦について、何かコメントは」
資料をしまいかけた手を止めて、辻は答えた。
「あれは、君、山を越えた方が負けだよ」
帰国した後、岡田は新聞の合本の頁を繰った。
東部ニューギニアについての記事は、大本営の簡略な発表だけだった。
議会への戦況報告で、東條陸相が「ガダルカナルおよびブナにおいて苦戦せる皇軍は」と少しだけ触れているのを発見した。
岡田は、『ニューギニア山岳戦』と題した小説を執筆し、『新青年』に投稿した。
書けない事ばかりだったが、ここで自分が書いておかなければ、という心持ちで筆を執った。
フィリピンに出張中、邦字新聞に自分の顔写真が載っていた。
何だろう、まさか訃報じゃないだろうな……
『山岳戦』が直木賞を受賞した、という記事だった。

∴

ドゥーリットル飛行士の処分問題で、陸軍が紛糾していた。
爆撃後、中国に逃げた飛行士のなかで、八人が不時着などを経て、日本側に捕捉され上海の収容所に拘束されていたのである。
防空の責任を負う参謀本部は、強硬だった。杉山元参謀総長は、部下につきあげられ、無差別爆撃は戦争犯罪であるから、捕虜となった飛行士は厳しく処断するべきだ、と陸軍省に要求してきた。
東條は苦慮した。
彼の人は、人道上の立場から、敵兵にたいして酷い扱いをする事を忌避していた。
その心中が良く解っていたので、参謀本部の要求をそのまま受け入れるわけにはいかない。
(だいたい無差別爆撃は、海軍が重慶に対して何十回も行っているのだから、処罰を正当化するのは難しかった)
とはいえ、空襲での死者が五十名、全焼家屋三百戸という被害が出ているので、何もしないわけにもいかない。
結局、彼の人の意志を忖度しつつ、空襲隊員の処分が検討された。
日本は、ジュネーヴ条約を批准してはいなかったが、開戦当時、アメリカからの問い合わせに対して条約を遵守すると回答していた。そのため、空爆に参加したというだけでは、戦争犯罪に問う事はできない。一般人を無差別に殺傷した場合にのみ、罪を問える可能性が出てくる。けれども、当時、このような罪への処罰を規定した国際法規の条文は存在しなかった。
参謀本部は独自の軍律を作成し、飛行士たちを裁く事にした。
軍律を定め、軍律法廷を設ける権限が戦闘現地の最高指揮官にある事は、国際的に認められていた。
結局、軍律法廷は、アメリカ側はもちろんの事、日本でもごく少数の人間しか識らないうちに、上海で開かれた。
法廷は、被告全員を有罪とし、死刑判決を下した。
「陛下の御仁慈を体して、死一等を減じることにしたいのだ

が」

軍律法廷は、参謀本部の統帥事項であり、東條もごり押しする事は出来なかった。

杉山は、減刑に納得しなかったが、妥協を認めた。

「総理として私は、死一等を減じる事を主張するが、総理としては陛下には何も申しあげない」

禅問答のような言葉を、東條は杉山に発した。

杉山は彼の人に奏上し、出来るかぎり寛容にすると申し上げた。

結局は、東條の匙加減で、三名が死刑、五人が終身禁固となった。

死刑執行の四日後、日本政府は、米機搭乗員を戦争犯罪の廉で「いく人」か処刑したと、目立たぬように発表した。

∴

十二月十一日、彼の人は東京駅から御召列車に乗り込んだ。

同夜、京都御所に宿泊した後、翌日、軍服に大勲位、功一級各勲章、記章をつけ、剣璽を奉じ、百武三郎侍従長、松平恒雄宮内大臣、木戸内大臣、蓮沼侍従武官長の供奉のもと、東條総理、八田嘉明鉄道大臣が扈従するなか、京都駅から御召列車で宇治山田駅に着いた。

駅長の先導により鹵簿を整えた後、板垣御門前で下りた。

小倉庫次侍従の先導で参入し、中重鳥居を通り、内玉垣御門から手水所に寄り瑞垣御門に入り正殿階下大前の拝座につき、侍従長が捧持した告文を奏した。ついで玉串を手にし深く大前で祈った。

行在所に還御した後、再び鹵簿で皇大神宮に向かった。

内宮行在所で再び潔斎した後、彼の人は御料車に乗って内宮に向かった。

低速で進む御料車の前後を、近衛将校と禰宜が囲んだ。

御料車は、第二鳥居、神楽殿、五丈殿を通過し、板垣御門前で下り、二十二の石段を踏み、手水を使った後、瑞垣御門からは告文を奉じた百武侍従長のみを従えて、内院へと進んだ。

正殿階下浜床に着御し、侍従長の奉じた告文を大御前に奏した。

彼の人は、開戦一年での皇軍の精鋭の振古未曾有の戦果を奉告し、篤く神恩報謝の詞を述べた後、戦局の前途、容易ならざる非常の秋に民一億の総力を結集して現下の難局を克服する事を誓うとともに、重ねて皇祖の御加護を願った。

彼の人は、板垣門前に現れた。

東條首相、松平宮内大臣、梨本祭主宮殿下など、誰もが感泣していた。

再び彼の人は車中の人となった。

戦時下に天皇が、伊勢神宮に親拝するのは、開闢以来の事であった。

（以下次号）

難解 考えるパズル PART 1

賞金総額20万円

＊PART 2は457ページです。

漢字シークワーズ

① ヒントに当たる言葉を盤面から探します。

② 探す言葉は←→↑↓↖↗↙↘の8方向のどれかで一直線上に隠れています。

③ それぞれのヒントの最後にある数字は、漢字で書いたときの字数です。

④ 一カ所の漢字を複数の言葉が重複して使うことがあります。

質	経	神	母	子	鬼	呂
面	白	半	分	中	椅	風
青	導	蛋	人	物	見	長
体	写	被	造	鶏	血	大
皆	御	真	湖	院	統	納
既	夏	浴	衡	領	書	言
日	視	量	水	降	元	頭
食	度	感	好	海	苔	巻

●懸賞問題…一度も使われずに残った漢字（3つ）を並べ替えてできる言葉は何でしょう？

●ヒント

◇最高気温30度超え。猛暑日よりはマシか③
◇ソファーもベンチもこれ③
◇梅雨があるので、北海道以外の地域では夏前のこれは多くなる③
◇三大栄養素の一つ。肉や卵などに多い③
◇お高い犬や猫についてきたりする書類③
◇昼間に星空が見えたりする原因④
◇川の途中をせき止めたりして作る、大きな水たまり③
◇側面が黒い、円筒形の食物③
◇洋館の屋根にいたりする。かつてこれにたとえられた首相もいた③
◇マイクロチップに欠かせないケイ素など③
◇泳いだり焼いたり、夏のレジャー代表格③
◇事件現場の野次馬もこれ③
◇フランス語で言えばデジャ・ヴ③
◇室町以降に完成した日本独自の建築様式③
◇細かいことがいちいち気になるたち③
◇右大臣に次ぐ高官。小豆の品種名にも③
◇タレントは――調査の結果に一喜一憂？③
◇ということは残る50％は真面目だったと④
◇書籍の１ページ目に書かれていたりするメッセージ③
◇パシャパシャと撮られるほう③
◇像ではザクロを手にしていたりする④
◇長さと容積と重さ③
◇体がふやけるぐらい湯船につかる③
◇イメージしている未来の姿。バラ色になる予定でもこう呼ばれる③
◇米国やフランスなどの元首③

●6月号の答え

「源氏蛍」でした。

北	黄	森	寸	亭	主	関	白	望	公	太	生	花	落	
坊	蛍	林	十	人	孝	人	盆	脚	陽	学	継			
主	来	浴	四	和	二	紫	源	層	命	仕	中	探	過	
数	身	風	新	季	紫	源	氏	気	力	未	事	件	生	大
半	知	氏	気	力	命	層	学	継						

応募方法 葉書に「7月号の答え」と郵便番号・住所・氏名・年齢・性別、7月号で興味をもった記事を一つお書きの上、〒102-8008千代田区紀尾井町3-23文藝春秋編集部「考えるパズル7月号PART1」係へお送り下さい。PART2の解答は別の葉書でお願いします。

締切り 11年7月7日。当日消印有効。

当選者発表 11年9月号。

賞金は正解者から抽選でPART1、2それぞれ10名様に1万円ずつお送りします。

＊葉書に記載いただいた情報は、編集の参考及び当選金送付、ならびに㈱文藝春秋の刊行物等のご案内に使用いたします。

5月号の当選者

飯泉常夫（茨城）大船八郎（北海道）長有子（滋賀）岸田美幸（大阪）島崎春海（東京）田澤美千代（神奈川）田中忠治（熊本）野中邦博（山梨）浜田晶子（埼玉）福代早苗（岩手）

5月号の応募総数 5428通

●制作／ニコリ パズルのお問い合わせは03-5821-7143（土・日・祝日を除く正午～午後5時）